

## 第1回全体構想策定作業部会での討議内容の整理

(平成18年2月22日)

### 1. 全体構想の構成と記述の範囲

全体構想とは(全体構想の役割)

- ・阿蘇の草原再生が他地域と一番違うところは多くの主体が関わること。生業として草原を使っている方をはじめ、多くの主体により草原再生の活動を進めようとするとき、どのような方向性を持って進めたらいいかをきちんと議論し、方向性をまとめるべきものが全体構想だと思う。

全体構想で訴えたいこと、阿蘇草原再生が目指すべき方向

多様性のある草原環境の再生が重要

- ・草原には疎林や長草型、短草型などいろいろな草原があるので、再生の具体的なイメージとして、そういうものがセットであることの重要性を訴えるべき。

畜産農家の活力回復が不可欠

- ・地元として言いたいのは、牧野を維持してきたのは畜産農家の方々。しかし高齢化、後継者難が今は深刻。

循環型の草(自然)の利用の仕組みの再生、持続可能な社会を目指す(阿蘇からの発信)

- ・千年保全してきた草原がドラスティックに変化しているということをしっかり認めるべき。今後千年間維持していくための知恵を、草の循環利用の原型など昔のシステムの中から学び、どうやって近代的なものにしていくかの検討が必要。
- ・草利用の原型として、草は牛とともに生活にも作物収穫にも不可欠であり、その中心に牛がいた。優れた循環の社会であり、日本の社会形態を見直すことにもつながり、阿蘇から発信していくこともイメージしながら考えていくことも大事。

多様な担い手が持続的に参加すること、そのために草(及び草原)に多様な価値を与える

- ・ボランティア導入牧野も増え、入会権者だけで守るという実態は変わってきている。多様な主体が参加する保全・管理の仕組みづくりが必要。
- ・野草は畜産農家や野菜農家、環境にとっても非常に価値のあるもの。草に多様な価値観を見出すことにより、多様な担い手、関心を持つ人をひきつけていくことが必要。
- ・阿蘇の再生を考えると、草原の多面的な価値を訴える必要がある。

草原保全・再生の公益性を訴え、国民による費用負担の方法も検討を

- ・地元や市民による取り組み、そのベースとなる国民共有の財産ということで位置づければ、国、行政による施策の必要性や方向性も出てくる。
- ・いずれは、国民が国土を守っていることに対してお金を払うしくみができてくる。公益性を守るために国民が税金を払うとしたら、どのようなタイプの払い方があるか、を農水の立場から考えていきたい。

## 全体構想の構成

目標と、実現への取り組みの方向づけが必要

- ・ 私たちが目指す阿蘇草原再生について、共通認識を持つことが出発点。
- ・ 再生目標を具体化し、重点的な地域の考え方も整理する必要がある。
- ・ スローガンだけでなく、目標実現のための取り組みの方向づけが必要。

## 記述の範囲

取り組みの重要度を示し（地域別等）取り組みの具体化につなげる

- ・ 地域区分して取り組みの重要度、順序を示し、何らかの行動を起すことにつなげていくべき。
- ・ 阿蘇全域を再生するのは無理であり、地域分け、長期・短期に分ける必要がある。
- ・ 南と北では地域的にも違い、考え方も違うと思う。全体的な目標はあると思うが、地域別の方向性まで踏み込んでやっていければいい。

長期なのか短期なのか、両方を併用せざるを得ないのか

- ・ 方向付けとして将来的には野草地が生き生きしたものにするのか、あるいは畜産農家にとってはここ1～2年が重要であり、その視点でものを言うのか。産業の質も変わっており、昔は畜産と農業と林業が一括した産業構造でやってきたが、現実には畜産だけ大きくするのかというような問題も出てくる。

全体構想は総論

- ・ 全体構想なので総論になる。
- ・ その内容は協議会全体で合意できるようなものにしていく。

小委員会との役割分担から、基本的考え方を提示

- ・ 目標に対する施策は小委員会で議論して作る。
- ・ 全体構想で基本的な考え方をしっかり示し、小委員会で仕組みづくりや取り組みを行うときにその考え方に沿って進められる、という形が望ましい。

## 2. 全体構想に盛り込むべき内容

### (1) 「背景と経緯」に関連して

草原の価値

- ・ 昔から続いてきた草原の役割や価値、現代における価値、それが前提にあることが必要。

生業とともに維持されてきたこと

- ・ 草原の維持管理は行政区の小集落によって行われてきた。化学肥料がないときには、牛1頭を飼っていなければ田畑を耕せない、厩肥を入れることができないということで、野草が資源として生活を支えてきた。だからこそ草原が維持されてきた。入会権も利用に対応していたが、今は利用者と権利者が分かれてきて様々な問題が発生している。

草原の危機

- ・ 人手が加わって維持されてきた草原の多様な環境が豊かな動植物相をもたらしてきたが、最近では消えていく動植物がスピードアップしている。
- ・ 高齢化、後継者難で野焼き輪地切りも若い人は来ず、年寄りで行うような状況。

## (2) 「対象区域」に関連して

### 改良草地と野草地とは区分

- ・ 再生の対象として改良草地と野草地の分け方をはっきりしていったほうが、地元行政も動きやすい。

### 対象を絞ることも検討

- ・ 全部は無理であり、モデル地区などを作って進め、具体的に最終的に再生した草原ができるということを第一に考え、地域などを決めた論議にした方がいいのではないかと。阿蘇は基本的には牧野組合により成り立っている。放棄地も沢山あり、そういう再生も組み込まなければならないし、そういう意味で牧野組合を指定してもいいのではないかと。
- ・ ピンポイントに維持活動をしていくことは現実的なことだと思う。スギ林を買ってそこを伐採して昔の草原に戻すということもあるが、できるかどうかは夢である。夢の部分はどう盛り込んでいくかも観点としては必要かと思う。

## (3) 「目標」に関連して

### 昭和30年代までの草原の姿を現代型で実現

- ・ 目標の書き方は、推進計画にあるようなスローガンのものから、もう少し具体的なものにして、例えば、千年続いてきた草原の原型は昭和30年代位までの草原にあるということで、そのときのようなことを現代型で実現する、というように表現するか。

### 他地域とは違う阿蘇らしさを示す

- ・ 阿蘇らしさ、アイデンティティがなければいけない。畜産でも地域によって全く違う。阿蘇の草原の資源は千年もった草資源であり、こういうアイデンティティが再生の目標の中にあるのではないかと。
- ・ 集落ごとで維持管理活動をやっている姿、こうして守られている原野をモデルとして示せば、それも目標になるのではないかと。

### 人々の見る目を「愛着を持った美しさ」に変えていく

- ・ ボランティアとして野焼きや輪地切りに参加したところは愛着がわいて、それがどんどん広がって阿蘇が好きになっていく。自分が関わり、地元の人々とも触れ合いながら、もうひとつの阿蘇の魅力を理解していくのではないかと。年間1900万人訪れる人々の見る目を、「美しい」から、「愛着を持った美しさ」に、また「楽しむ観光」から「守りながら楽しむ観光」に変えていければいいと思う。

### 地域の違いも踏まえた、スローガンプラスアルファを

- ・ 昭和30年代までが理想の姿としても、阿蘇郡内の各地域で違い、タイプごとでの理想の姿は違う。具体的には無理でも、大きなところでスローガンプラスアルファを出す必要がある。

#### (4) 「取り組み」に関連して

##### 生物多様性保全

- ・ 疎林や長草型、短草型などいろいろな草原をセットで維持することが重要、それにはずっと人為を加えていかなければならない。

##### 牧野利用、管理

- ・ 大分、菊池郡などから預託放牧を受け入れているが、栽培草地と野草地がなければ受け入れは困難。牛は、5月20日以降10月後期まで、ススキの穂が出るまでは野草地で十分飼える。加えて、栽培草地があればそれを利用しながら、預託の受け入れができる。そうすることにより、その集落や組合だけが草原の価値観を得るということだけでなく、阿蘇草原の価値を広く活かしていくことになる。
- ・ お金よりもソフト的な面で支えるというのが非常に大切。何より農林業を続ける後継者を残す、そして生業として成り立つことが大切だということ。
- ・ 入会権者だけで守るという実態は変わってきている。支援ボランティアも高齢化するなかで、持続的に支援体制を確保していくことが必要。

##### 草資源利用

- ・ 草資源のバイオマス利用について見直し、多様な利活用について整理していくことが必要。社会的、経済的しくみの検討、多様な主体の参加のしくみも含め、どんな方法で草原再生を実現していくのか検討していくべき。

##### 後継者育成、環境学習

- ・ 後継者問題を解決していくためには、単に経済的問題だけでなく、地元の昔の人が持つ原野への「愛着」と、今の若い人が持っている「愛着」は大きく変わってしまっている、といった観点も必要。基本的考え方として、環境学習に取り組むことにより後継者問題も徐々に改善していこうという方向性を、全体構想の範囲の中で出せばいい。
- ・ 青年の家には1日400~500人は来ているが、研修して帰るだけでなく、阿蘇を深く知りたいという話も聞く。町も村も全体が若い人がおらず、若い人を地元に残すためには、収入を得るための活路を見出さなければならない。
- ・ 外からくる人にも阿蘇の草原について理解していただき、外部からもバックアップしていただけるような方策がないか。

#### (5) 「取り組みの進め方」に関連して

##### 多様な主体が参加する

- ・ 多様な主体が参加する保全・管理の仕組みづくりや方向性を考えていく。
- ・ 外からくる人の視点も重要。
- ・ 阿蘇には年間1900万人の観光客があるが、草原が維持されてきたことによることが大きい。草原を利用する観光業の方にも入っていただき考えていくことが必要。

##### 地域の資源として守るシステム、総合的な取り組み

- ・ 草原はたくさんの方が管理できなくなれば維持できない。1農家が数百haの土地を持

っても管理できない。地域の資源として守るシステムがないと草原の再生は成り立たない。

- ・ 阿蘇は人々の生活と融合してきた地域である。農畜産業、観光と自然の豊かさをリンクさせていくことを考えていくべき。観光で自然を利用する場合に大事なことは、利息だけを使い、元金に手をつけないこと。

#### モデル事業的に実施

- ・ 当面何をするかというときに、モデル地域という方法もあると思う。あらゆる観点から、モデル化する必要があるという地域を重点地域として、その中で、しくみとして社会に発表できるものが提案できるのか、ということやってみることもあると思う。
- ・ 何をすべきかという優先度を整理する必要がある。

#### 情報発信

- ・ 阿蘇や全国の人々に発信するためには一般的な図書として出版した方がいい。

#### 自然環境調査や科学的情報に基づく地域に即した事業実施

- ・ 広い範囲での取り組みであるが、具体的な線引きがなされていない。GIS システムのデータを活用して、保全すべき草原の優先度とか位置づけをきっちりすべき。
- ・ 草原の自然度の状況は環境省が植生図を作っているが、阿蘇独特のランク付け、他地域とは違うレベルの植生図作成や、阿蘇の特性をベースにした地域のレッドデータが重要視されるべき。

#### (6) 「協議会委員と役割分担」に関連して

・